

夏の多摩川

凡例

植生	記号
自然の草地	駐車場
樹林	お手洗
タケ・ササ地	危険なところ
水面	大きなめだつ木
砂・れき地	湧水・伏流水の出口
基礎のあらわれているところ	水路
人工改変地（公園など）	みえない水路



実(秋)

セミしぐれ

真夏の太陽がジリジリと照りつける頃、加美上水公園などの多摩川沿いの林やハケの林、それに堤防の桜並木の下を歩いてみましょう。あたり一面、騒々しいくらいにセミしぐれにつつまれます。

よく聞いてみると、時期や場所によって違った鳴き声が聞こえます。

・7月ごろ

最初に聞くのがニイニイゼミ（ニイニイとカチーカチー）です。鳴き声がいさく聞き分けにくいこともあります。福生での生息数は少ないようで、加美上水公園と熊川団地で聞けるくらいです。

・8月ごろ

ヒグラシ（カナカナカナ・ケケケケ）の音が聞こえます。加美上水公園や柳山公園と熊川団地で数匹の鳴き声が朝夕に響いているようです。

ツツクワボウシ（オージンツツクワ）は市内では最も普通にみられ、どこでも声が聞こえます。8月過ぎまでにぎやかです。

アブラゼミ（シージー）とミンミンゼミ（ミーンミーンミーン）もごく普通に市内でみられるセミです。

クマゼミ（シャーシャーシャー）は、元来西日本にすんでいたセミで市内では数が少ないのですが、8月中旬ごろに南田園ぞいのハケでまれに声を聞くことができます。



アブラゼミ



ミンミンゼミ

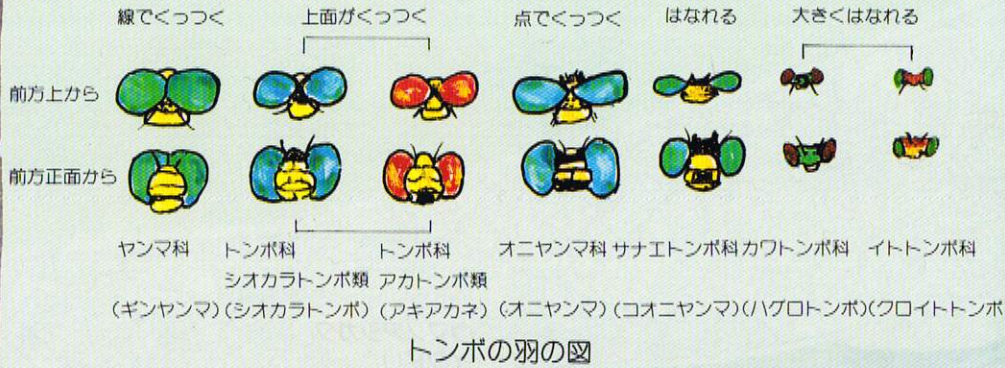


前羽と後羽が似ている
均翅類
イトトンボ、カワトンボなど
前羽と後羽が異なる
不均翅類
オニヤンマ、アカアカネなど
トンボの羽の図

トンボ（成虫）の見分け方 Q & A

Q1 トンボのめがねは水色めがね？
A ほんとに水色（青色系）の大きな複眼をもつ種類が多いのですが、栗茶（赤色系）のものもあります。

Q2 トンボの2つの複眼は離れている？
A ほんとに離れている種類もありますが、両眼がふれ合っているのがあります。



トンボの羽の図

Q3 前羽と後羽の形は似ている？
A このことがトンボの大きなグループ（亜目）分けのポイントです。

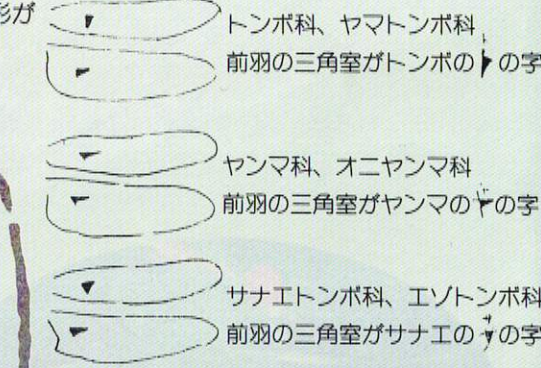


シオカラトンボ
羽を開いて止まります。



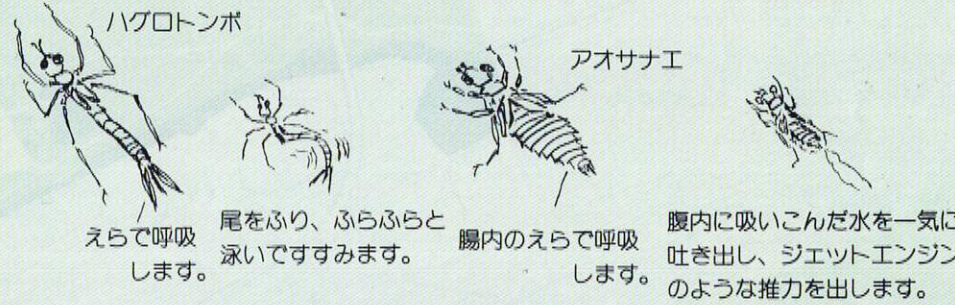
ハグロトンボ 交尾
羽を開いて止まります。

Q4 ヤマナ科とトンボ科の羽の違いは？
A 前羽の三角窓（三角形の穴）の形がちがっています。



ヤゴ（トンボの幼虫）の見分け方 Q & A

Q1 ヤゴを見てその成虫の姿がわかるの？
A わかります。トンボの観察図鑑を見てください。まず最初に大きなグループ分けをしてみましょう。



均翅亜目と不均翅亜目の図
均翅類
カワトンボ科 イトトンボ科
アオイトトンボ科 モノサシトンボ科
不均翅類
サナエトンボ科 ヤマナ科
オニヤンマ科 トンボ科など

Q2 ヤゴはどこにいるの？
A

水たまりにいる（止水性）
水草にたかっている一均翅類 アジイトトンボ・アオイトトンボ・モノサシトンボなど
水底にいる一不均翅類 アカトンボのなかま・シオカラトンボのなかま・ヤマナのなかま
流れに（流水性）
水草にたかっている一均翅類 ハグロトンボ
水底にいる一不均翅類 オニヤンマ・サナエトンボのなかまなど

Q3 ヤゴはどうやって泳ぐの？
A Q1の図をもう一度見て下さい。



オニヤンマ
羽化がら



ウスバキトンボ群



オソアイトトンボ

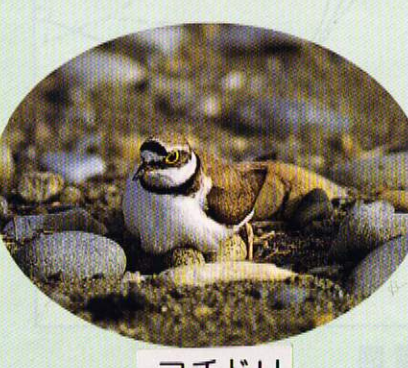
河原に集まる夏の鳥たち

夏、ハケ沿いの道ではカササギの音が響きます。田園通りの街路樹では、セグロセキレイのひなが巣立ち、電線にツバメの幼鳥（子ツバメ）たちが集まって列をなして止まっています。

その頃、多摩川ではオギやツルヨシの深い草原から「ギョギョシ、ギョギョシ」とオオヨシキリにのびやかな声、けれどもなかなか姿は見えません。空中には大きく山形に波を描いて飛び鳥の「ヒツヒツヒツ……チャツチャツチャツ」という音がします。セッカです。河原の砂れき地で「ピツピツ、ビビビビ、ビ



オオヨシキリ



コチドリ



コサギ



センニンソウ

魚の名前をいくつか知っていますか？

魚のすみかには沢のような傾向がありました。なお、一線をついた魚は生息数が少ないものです。
①わき水だまり ホトケドジョウ、シマドジョウ、各種の稚魚
②本流の早瀬 カジカ、アユ、ウグイ、浅瀬にはアブラハヤ
③本流の淵 ウグイ、オイカフ、アユ、アブラハヤ、カマツ
④本流そいのわんど（入江） 水底にはシマドジョウ、カマツ、ギバチ、ジュスゲハゼなどの水底に止まる種類、モツゴ（クチボリ）、オイカフ、各種の稚魚
⑤池・沼のたまり ギンブナ、ゲンゴロウブナ（ハラブナ）、コイ、ドジョウ、モツゴ（クチボリ）、ブルーギル、ヨシノボリ、ナマズ
川は場所によって流れの速さ、深さ、水のきれいさ、水底の砂礫の大きさなどが違います。これらの違いを反映してそれぞれの魚が選ぶすみかも変化に富んでいるのです。

漁業組合では、ウグイの産卵期に産卵場所に囲いをして、魚の資源の保護もしています。

ある種の魚が少なくなったり、いなくなったりする原因を考えてみてください。生活排水の流入などによる水の汚染や、わき水だまり、わんどなどの整地、ブラックバスなどの肉食性の魚の放流もその一因です。きれいな川の水には、多くの種類の川魚（水生昆虫）がすみ、それを食べる魚の種類も多くなります。また、その魚や昆虫をえさとする野鳥も多くなって、川の自然環境は「ラエティ」に富んで、自然度も高くなります。私たち人間には、自然観察や川遊びがより楽しくなるというわけです。

みくり池のミクリ

五日市線鉄橋の下流、福生団地の桜並木の土手に細長い小さな池があるのを知っていますか。この池は昔の多摩川の流れが取り残されてできたもの（河跡池）です。現在は、土手の上から水面が見えないほどタチバナギとイヌコリバナギにおおわれてしまっていますが、かつてこの池にはその名前にあふれるようにミクリという抽水植物（根や茎の下部が水中にある植物）がたくさん生えていました。ミクリという名は美がちょうと栗のいがのようにみえることから付いた名前です。

ではどうしてみくり池でミクリが見られなくなってしまったのでしょうか。原因としては、以下のことが考えられます。

- ・多摩川の流れが安定して池の水位の変動が少なくなったこと
- ・流れ込む水が濁って水質が悪化したこと
- ・砂や泥が多くなってきたこと
- ・池の周りのヤナギが大きく成長し、日当たりが悪くなったこと

今では福生市内ではほとんど自生していませんが、対岸（あきる野市）のやしろ池などではまだまとまとた数で生育しているのが観察できます。

ミクリ群落（みくり池'88年）



ミクリ 果実

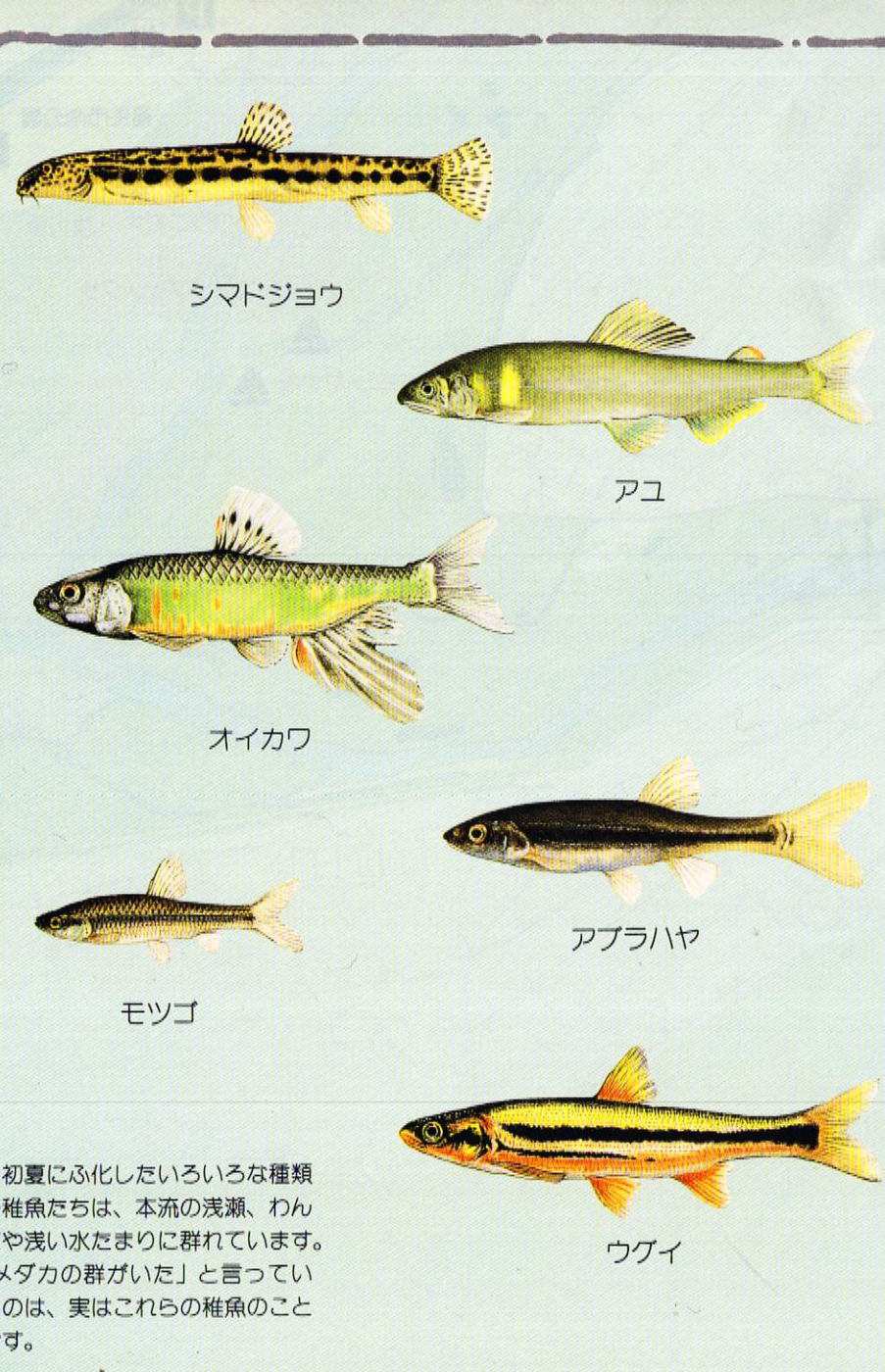


オソフサモ

対岸（あきる野市）のひとつ池にだけ群生している水生植物です。



ガマ



カワラナdashiko



コトツナギ

背丈は低いですが草ではなく樹木です。

水生昆虫の見分けかた

つりのえきにする川虫などの水生昆虫は、多摩川の本流の早瀬、浅瀬、わんどや池沼の水たまりなど環境に応じてすみわけをして生活しています。

カゲロウ類幼虫—カワムシ チョロムシ
短い羽がある 尾2本または3本 爪1本

カワゲラ類幼虫—オニカワムシ
短い羽がある 尾2本 爪2本

トビケラ類幼虫—フクロカワムシ
羽がない 足がある

双翅類—コシカカ幼虫—アカムシ
羽がない 足がない

その他
トンボ類—幼虫はヤゴと呼ばれる
甲虫類—ゲンゴロウ ガムシの幼虫 きなき 成虫
豚 類—ヘビトンボの幼虫



クス群落



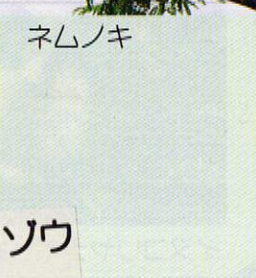
ヤマガヤツリ



保護色のヒグナガ
カワトビケラ
下を向いています。



ヤブカンソウ



ネムノミ